

査読付論文

断絶の形而上学

——グレアム・ハーマンのオブジェクト指向哲学における「断絶」と「魅惑」の概念について——

飯盛元章*

要 旨

本稿は、グレアム・ハーマンの「オブジェクト指向哲学」を「断絶の形而上学」として描き出すことを目指す。第1節では、オブジェクト指向哲学の基本的な立場を明確にする。事物、すなわちオブジェクトはあらゆる関係から退隠するのであり、オブジェクトの自律的な実在性と関係一般のあいだには、乗り越え不可能な断絶がうがたれている。第2節では、たがいに退隠するオブジェクトどうしが、断絶を無効化することなく関係するしかたを、「魅惑」の概念に着目して解明する。オブジェクトどうしは、魅惑によって「触れることなく触れる」のである。魅惑の経験とは、接続の経験であると同時に、断絶の経験でもあるということがあきらかになる。第3節では、魅惑の概念が、人間不在の実在論的世界を描くためのひとつの手がかりとなる、ということを示す。

目 次

1. 上方解体と下方解体の哲学から、オブジェクト指向哲学へ
2. 代替因果、触れることなく触れる、魅惑
3. 汎魅惑論的宇宙のほうへ

本稿は、グレアム・ハーマンの「オブジェクト指向哲学」(object-oriented philosophy)を「断絶の形而上学」として描き出すことを目指す。

ハーマンは、ハイデガー哲学の研究から出発し、それを実在論的なモデルへと発展させ、独自のオブジェクト指向哲学を構築したアメリカ出身の哲学者である。彼は、その後、カンタン・メイヤスー、レイ・ブラシエ、イアン・ハミルトン・グラントらとともに、「思弁的実在論」(speculative realism)と題されたワークショップを催し¹⁾、これに端を発した運動の中心的な牽引役として活躍

してきた²⁾。思弁的実在論は、カントからポスト構造主義にいたるまでの哲学が前提としてきた人間中心主義を批判し、あらたな実在論を主張する野心的な立場であり、ハーマン自身のオブジェクト指向哲学もその立場に呼応している。

日本において、ハーマンのオブジェクト指向哲学は、おもに雑誌『現代思想』における特集などをつうじて、思弁的実在論との関連であつかわれてきた。しかしこれまでのところ、日本において彼の哲学体系そのものを主題的に論じた論文等のごくわずかである³⁾。本稿はこうした状況を受け、ハーマンの哲学そのものを主題的に論じ、「断絶」と「魅惑」の概念に着目することで、彼の哲学体系の構造を明確にすることを目的とする。

本稿第1節では、まずオブジェクト指向哲学の基本的な立場について確認する。オブジェクト指向哲学は、個体的事物の実在論である。オブジェクト指向哲学にとって、事物は自律的なものとして、ただそれ自体で存在している。事物は、人間

* いいもり もとあき 文学研究科哲学専攻博士課程後期課程

2016年10月5日 査読審査終了

によってどのように認識されているかが、あるいは他の諸事物とどのような関係を結んでいようが、そうした諸状況とはいっさいかわりなく、ただそれ自体で存在しているのである。わたしたちは、そうした事物そのものに直接的に触れることはできない。わたしたちに直接的に現前しているものは、事物のいわばカリカチュアのようなものにすぎず、事物そのものはその背後へと逃れ去ってしまうのである。つまり、事物そのものとその現われとのあいだには、還元不可能な「断絶」(rift)があるのだ。ハーマンはさらにここから、こうした断絶を人間と事物のあいだだけでなく、事物どうしのあいだにも見いだそうとする。ハーマンがよくもちいる例でいえば、木綿と火のあいだにもそうした断絶がうがたれている。両者は、燃焼というできごとにおいてでさえも、たがいに直接的に触れあうことはない。両者は、燃焼というしかたでの関係によっては汲みつくされない余剰とともに、みずからの個性のうちへと引きこもっている。このようにオブジェクト指向哲学は、あらゆる存在者のあいだに還元不可能な断絶を見いだすことによって、存在者の実在性を最大限に担保した「頑強な実在論」(hardcore realism, RO 179)なのである。第1節では、こうしたオブジェクト指向哲学の基本的な立場を、反オブジェクト指向の哲学とみなされる立場とのちがいをつうじて、明確にすることを目指す。

第2節では、存在者が、以上のような断絶を無効化することなく関係しあうしかたを考察する。もし存在者がみずからの個性のうちへとたんに引きこもっているだけで、まったく関係しあわないとしたら、いかなるできごととも生じることはないだろう。しかし、世界はじっさいにそのようにはなっていない。さまざまな事物がわたしの経験を彩り、また事物どうしはなんらかのしかたで関係しあっている。したがって、オブジェクト指向哲学は、関係性から退きみずからの個性へと引きこもった事物が、それでも他のものと関係する

しかたを説明しなければならないのだ。ハーマンは、この難問を「代替因果」(vicarious causation)の理論として語る。事物は、なんらかの媒体をとおして、他のものに間接的にのみかかわる。それは、いわば「触れることなく触れる」という事態である。ハーマンは、そうした事態を解明する手がかりとして、美的な人間経験である「魅惑」(allure)に焦点をあてている。

第3節では、「触れることなく触れる」ということを可能にする魅惑のはたらきが、たんに人間経験に限定されたものではなく、あらゆる存在者にあてはまる一般的な構造であるということ考察する。魅惑は人間と事物とのあいだで生じる特殊な関係ではなく、あらゆる事物のあいだで生じる一般的な関係であるということが言えてはじめて、オブジェクト指向哲学は、たんなる美学であることを超え、実在論的な形而上学であることができるだろう。しかしハーマン自身は、この移行について直接的な論証は展開していない。本稿は、魅惑の概念に着目し、それが人間不在の実在論的世界を描くためのひとつの手がかりともなる、ということを示す。

1. 上方解体と下方解体の哲学から、オブジェクト指向哲学へ

この世界はさまざまな事物であふれている。わたしたちは日常生活において、おおくの事物にとりかこまれている。ハーマンはこの素朴な直観から出発し、みずからの哲学的モデルを練り上げていく。「懐疑ではなく素朴さから出発すれば、ただちにオブジェクトが中心的位置を占めるようになる」(QO 7)。事物、つまりオブジェクト⁴⁾を中心に据えた哲学を構築しようというのが、ハーマンのオブジェクト指向哲学の根本的な意図である。

では、オブジェクトとはなにか。これを明らかにするまえに、まずは、おおくの哲学者がこの常識的な素朴さを迂回するように思考してきたとい

うことを確認したい。ハーマンは『四方オブジェクト』や、そこで提示された体系的図式を簡潔にまとめた論文「オブジェクトへの道」などにおいて、みずからのオブジェクト指向哲学と対立する哲学的戦略を、「下方解体」(undermining)と「上方解体」(overmining)⁵⁾というふたつのタイプに整理して論じている。まずは、オブジェクト指向哲学と対立する、下方解体と上方解体の哲学について確認することにしよう。

ハーマンによれば、そもそも「哲学は反オブジェクト指向の企てとしてはじまった」(RO 172)。ソクラテス以前の哲学者たちは、オブジェクトはより根本的なものから成り立つのだと考え、哲学はむしろそうした深い実在のほうをあつかうべきであるとした。オブジェクトよりも深い実在とは、タレスにとって水であり、アナクシメネスにとって空気であり、またエンペドクレスにとって四元素であり、デモクリトスにとって原子であった(QO 8)。彼らは、日常的に見いだされるオブジェクトをこうした深い実在へと還元したのである。

ハーマンによれば、このような振る舞いは古代ギリシア哲学だけに限られない。そのような傾向は、現代哲学においても見いだされる。たとえばそのひとつとして、ハーマンはシモンドンを念頭において、「前-個体的」なものの哲学を挙げている(QO 9)。この哲学においては、個体そのものではなく、個体以前の領域に実在性があたえられるのである。またこれに加えて、ベルクソンやドゥルーズを念頭において、「差異の戯れ」あるいは「生成の根源的流動」の哲学が挙げられる。この哲学からすれば、「実在そのものは流動的であり、オブジェクトについて語ることは、生き生きとした内的ダイナミズムを奪って、生成を抽象的な状態へと結晶化することにすぎない」(QO 9)。

このように古代から現代にいたるまで、おおくの哲学が、オブジェクトそのものではなく、より

深い実在の方を中心に論じてきたのである。ハーマンはこうした哲学的戦略について、つぎのように述べる。

わたしたちの目的からすれば、それらを、哲学の根底としてのオブジェクトを下方解体する(undermine)戦略と呼べば十分である。そうした戦略はどれも、オブジェクトはあまりに特殊であるために、究極の実在の名に値しないのだと主張する。そして、特殊な事物を生じさせる、より深い未規定の基盤をひねり出すのだ。(QO 10)

素朴に見いだされるオブジェクトの下方に、それを生じさせる根源的な実在を設定して、オブジェクトをそれへと還元してしまう哲学が、下方解体の哲学と呼ばれる。それは、ハーマンのオブジェクト指向哲学が対抗する論敵の一方のタイプをなしている。

これと対をなすのが、上方解体の哲学である。ハーマンは、“overmine”という造語をもちいで、つぎのように説明する。

哲学の中心的な登場人物としてのオブジェクトを解任するまたべつのしかたは、オブジェクトを下方ではなく上方へと還元するというものである。オブジェクトに対して、実在的であるにはあまりに浅薄(shallow)すぎると言うのではなく、あまりに深遠(deep)すぎると言うのだ。この見方からすれば、オブジェクトは不要な仮説であり、悪い意味で「なんだかわからないもの(je ne sais quoi)」である。オブジェクトを下から下方解体するのではなく、上から上方解体するのだ(overmine)。(QO 10-11)

下方解体の哲学からすれば、日常的に出会われるオブジェクトは、真の実在であるとみなすにはあ

まりに浅薄すぎる。そこで彼らはオブジェクトの下方に、より深く根源的な実在を設定し、それによってすべてを説明するという戦略をとる。これと反対方向の戦略をとるのが、上方解体の哲学である。この哲学からすれば、わたしたちの精神にあたえられる性質や、オブジェクト相互の関係こそがもっとも具体的なのであって、それを下支えるオブジェクトは不要なものとなる。そのため、彼ら上方解体の哲学者たちは、オブジェクトを上方の性質や関係へと還元することを目指すのだ。

上方解体の哲学者のうち、オブジェクトを、わたしたちの精神にあたえられる性質へと還元する哲学者として、ヒュームが挙げられる。彼の「知覚の束」説にしたがえば、「オブジェクトは、本物である印象と観念の系列に対するかさばった偽名にすぎないのである」(UO 24-5)。

さらにこれに加えて上方解体に属する戦略として、オブジェクトを関係に還元するというものがある。ハーマンによればこの傾向は現代における一種のパラダイムとなっている。こうした傾向に対するハーマンの反感は、最初の著作である『道具存在』から一貫したものであり、ハーマン自身のオブジェクト指向哲学を構築するうえでの重要な契機となっている。すこし長いが、そうした反感がはっきりと示された一節を『道具分析』から引用することにしたい。ハーマンは、つぎのように述べている。

どの陣営に属するのであれ、20世紀の成功した哲学の大半は、伝統的実体と超越的実在への攻撃をととして、偉大な果実を収穫してきた。この傾向は、後期ウィトゲンシュタイン、デイヴィッドソン、フッサール、ホワイトヘッド、ハイデガー、ハーバマス、ローティ、フーコーといったさまざまな著者のうちに見いだすことができる。「文脈化」がわたしたちの時代における知的使命となり、20

世紀はホーリズムの概念を擁護することを運命づけられたのだとさえ言えるかもしれない。今日、ホーリズムは、学術研究において魅力的な主張となる傾向にあり、常識が世界をばらばらにして独立した断片に変えてしまうのにくらべて、それはさわやかな海風のようにさえ感じられる。わたしは、アメリカのもっとも著名な教育専門家のひとりが、大学教育の意味とは「すべてが結びついている」ということを学生に教えることだと言っているのを聞いたことさえある。しかし、このように文脈が優位になるようなしかたで、独立した実体と本質を放棄することは、かつては解放的であったにせよ、もはやそうではない発想のひとつとなっている。いまや「文脈性」と「関係性」のパラダイムは、わたしたちの思考の隅々を支配するほどまでに、刻みつけられているのだ。(TB 174)

素朴にそれ自体で存在する事物の観念を放棄して、事物をとりまく文脈や関係によって思考することが、いまや学術研究において強いられている。「すべてが結びついている」のであって、そうした関係性のネットワークから思考を展開することが、現代のパラダイムとなっているのである。

ハーマンのオブジェクト指向哲学は、このパラダイムに真っ向から反対する。世界は、あらゆるものがあらゆるものと結びついた全体的なネットワークから成り立っているのではない。日常生活において素朴な態度で出会われる諸事物こそがもっとも実在的なものであり、それらを関係性のネットワークへと解体してしまうことはできない。そうした事物、つまりオブジェクトは、それが置かれている文脈や関係性とはいっさいかわりなく、それ自体でそのものとして存在しているのであって、「自律的な実在性」(QO 19)を有している。それゆえ、あるオブジェクトが置かれた

関係性や文脈のすべてを仮に網羅できたとしても、そのオブジェクトそのものを汲み尽くしたことにはならない。オブジェクトと関係することによって得られるものは、オブジェクトそのものではなく、カリカチュアのようにゆがめられたものにすぎないのである。オブジェクトそのものは、関係の背後へと逃れ去ってしまう。「椅子そのものは、私たちとの関係よりも深遠であって、汲み尽くすことのできない余剰 (unexhausted surplus) をとどめているのだ」(RO 174)。

こうしてオブジェクト指向哲学の立場は、関係性のネットワークから世界全体を捉えようとする発想を退ける。むしろ「世界は、あらゆる関係から退隠し (withdraw)⁶⁾、みずからの私的な空虚に住まうオブジェクトで満ちているのだ」(GM 86)。ハーマンはこの「退隠」という概念によって、オブジェクトに対して、関係に還元されない強固な実在性をあたえている。オブジェクトは、他のものとの関係から、つまり他のもののうちへと現前することから隠れ、汲み尽くすことのできない余剰とともに、みずからの自律的な実在性のうちへと引きこもる。これが、「退隠」によって意味されていることである。オブジェクトは自律的な実在性を有し、あらゆる関係から退隠するのだ。

ここからさらに、根本的な断絶にかんしてつぎのように述べられる。

オブジェクトと関係一般のあいだに、宇宙における根本的な断絶 (rift) がある。つまり、あらゆる関係を越えたオブジェクトの自律的な実在性と、他のオブジェクトの感覚的生においてカリカチュア化された形式とのあいだに、断絶があるのだ。(QO 119-120)

この引用文において「関係一般」と言われている点にかんして、補足をする必要がある。そもそもハーマンは、ここで人間の知的認識にまつわる有

限性を言っているのではない。つまり人間の知的認識は事物そのものを汲み尽くすことができない、という議論がなされているのではないのだ。オブジェクトをゆがめてしまうのは、認識だけでなく、行為も含めたあらゆる関係性である。しかも、人間と事物のあいだの関係だけでなく、人間と人間、事物と事物のあいだの関係をも含めた、関係一般がオブジェクトをゆがめてしまうのだ。

椅子の例で言えば、わたしは、椅子を視覚的に認識することによっても、触覚的に認識することによっても、あるいはそれに座ることによっても、けっして椅子そのものの余剰を汲み尽くすことはできない。さらにはわたしに限らず、猿であっても、蚊であっても、床であっても、けっして椅子の実在性そのものに直接接触することはできないのだ。椅子そのものは、わたしや猿、蚊、床といったオブジェクトの感覚的な生のうちにカリカチュア化された形式だけを残して、退隠してしまうのである。オブジェクトと関係のあいだにはうめることのできない断絶が横たわり、オブジェクトはたがいから退隠するのだ。

このようにオブジェクト指向哲学は、下方 (未規定の基盤) にも上方 (性質や関係) にも還元不可能な自律的な実在性をオブジェクトにあたえることによって、下方解体と上方解体の哲学に対抗する。ハーマンはみずからのこの哲学的立場の源流を実体の哲学のうちに見いだしている。彼はつぎのように述べる。

アリストテレス、スコラ哲学、ライプニッツは、第一実体と実体形相という発想のもとで、初期のオブジェクト指向学派を形成したのだとみなすことができる。彼らは、世界の根源的要素の地位から個体的存在者を追放しようとする目論む下方解体論者と上方解体論者の両陣営に包囲されながらも、果敢に立ち向かったのである。(RO 172-173)

実体の哲学とオブジェクト指向哲学は、下方にも上方にも還元不可能な個体的存在者を中心に据えるという点で重なる。それゆえハーマンは、オブジェクトを実体とも言い換える。ただし伝統的な実体とは異なり、「オブジェクトは、自然で、単純で、破壊不可能である必要はない」(QO 19)。すでに椅子の例からもあきらかなように、ハーマンは自然物だけでなく、人工物もオブジェクトとみなしている。また彼は、単純なもの集合体という、ライプニッツが採用した区別を拒否する。軍隊やオランダ東インド会社といった複合的なものであっても、オブジェクトとみなされるのである。さらにオブジェクトは、伝統的な実体のように、永遠に存続する破壊不可能なものである必要もない。けっきょくハーマンにとって、自律的な実在性をもつものであれば、なんであれオブジェクトとみなされるのである。オブジェクト指向哲学は、日常生活において素朴な態度で出会われるあらゆるタイプの事物に対して、最大限の実在性を担保しようとするのだ。

さてハーマンの見解では、アリストテレスやライプニッツの実体の哲学が、初期のオブジェクト指向学派を形成したのだが、彼自身は直接的には現象学、とくにハイデガーの解釈をつうじてオブジェクト指向哲学を構築している。「現象学は、オブジェクト指向思想のより同時代的な系譜である」(RO 173)とハーマンは言う。彼は最初の著作である『道具分析』のなかで、ハイデガーの『存在と時間』における道具分析に対して独自の解釈を試み、それをとおしてみずからのオブジェクト指向哲学を構築した⁷⁾。その際に、ハイデガーの哲学から積極的に吸収された要素が「退隠」である。ハーマンはみずからの哲学的モデルについて、「あらゆる現前からのオブジェクトの退隠は、私のモデルのハイデガー的側面である」(RS 293)と述べる。オブジェクトは、他のオブジェクトのうちへの現前から、つまりあらゆる関係から退隠する。オブジェクト指向哲学が描く宇

宙においては、オブジェクトの自律的な実在性と関係一般のあいだに、うめることのできない根本的な断絶が横たわっているのである。

2. 代替因果、触れることなく触れる、魅惑

前節において、つぎのことが確認された。オブジェクト指向哲学は、素朴な態度で出会われるオブジェクトを中心にした哲学の構築を目指した。そのために、下方にも上方にも還元不可能な自律した実在性がオブジェクトに確保され、オブジェクトそのものと関係一般とのあいだにうめることのできない断絶が見いだされることになった。こうしてオブジェクト指向哲学が描く宇宙において、オブジェクトはみずからのうちへと退隠することになる。

ところがこのことは、またべつの問題をもたらすように思われる。ハーマンは、つぎのように述べる。

わたしも、ホテルの外の猿も、隠れた実在におけるパイナップルをけっして見ることも、触れることも、摂取することもできない。このことを論理的に極限まで押しすすめるならば、どんな種類の関係も厳密には不可能になってしまっただろう。(GM 76)

素朴な日常的態度によって見いだされるオブジェクトを上下両方向からの還元から守るため、けっして触れえないいかに強固な実在性がオブジェクトにあたえられた。だがそのために、こんどはそうしたオブジェクトどうしが関係するという事態が不可能になってしまう。しかし素朴な直観によれば、さまざまな事物がわたしの経験を彩り、また事物どうしはなんらかのしかたでかかわりあっている。こうしたこともまた、素朴な日常的態度によって見いだされる事態であるだろう。それゆえ、オブジェクトの自律的な実在性と関係一般のあいだにうがたれた断絶は、全面的な真理

ではなく「半真理」(half-truth, GM 1) にすぎないのである。オブジェクトはみずからの実在性へと退隠しつつも、他のオブジェクトへとなんらかのしかたでつながらなければならない。オブジェクト指向哲学は、断絶を維持したまま、オブジェクトどうしを接続しなければならないのである。

ハーマンはこの矛盾した課題を、「代替因果」(vicarious causation) の理論として説明する。彼は、つぎのように言う。

オブジェクト指向哲学にとってもっとも中心的な論点は、代替因果である。これは、ながいあいだ評判を落としてきた機会原因の考えの修正版として導入された概念である。もしオブジェクトが他のオブジェクトとの知覚的あるいは因果的関係を超越しているならば……、それらがいかにして相互作用するかという問いがただちに生じることになる。より簡潔に言えば、わたしたちが抱える問題とは、非関係的オブジェクトがなんとかして関係するというものである。オブジェクト間の因果関係は直接的ではありえないので、それはあきらかに代替的でしかありえない。つまり、それはまだ詳述されていないなんらかの媒介によって生じるしかありえないのである。(GM 91)

機会原因論は、相互に独立した実体を関係させるという、オブジェクト指向哲学とおなじ問題に挑んでいた。だが機会原因論においては、実体は神の全能の力によって関係させられることになる。この解決方法を受け入れた場合、オブジェクト指向哲学は、他のオブジェクトに不可能なことが、なぜ神というオブジェクトによっては可能になるのかを説明しなければならないだろう。ハーマンは、歴史的に生じたさまざまな神学的問題を蒸し返すことなしに、孤立した実体の交通という問題に取り組むために、神に頼らずにこの問題に答え

をあたえるべきであるとする。このために考案された用語が、「代替因果」である。オブジェクトどうしは、神以外の媒介をとおして、代替的に関係する。代替因果は、退隠し直接的に触れあうことのないオブジェクトを、代替的に、つまり間接的に触れあわせなければならない。それによってオブジェクトどうしは、「触れることなく触れる」(GM 215) ことになるのである。

では、そのようないっけん矛盾した事態はいつたいどのようにして可能になるのだろうか。非関係的なオブジェクトどうしを代替的に関係させる媒介とはなんなのか。この問いの手がかりは、「魅惑」(allure) の概念にあるように思われる。代替因果の理論は、具体的には魅惑という人間経験の分析をつうじてあきらかにされる。「代替因果はつねに魅惑の一形式である」(GM 230) とハーマンは言う。魅惑は、オブジェクトどうしを触れることなく触れさせなければならないオブジェクト指向哲学にとって、不可欠な要素であるはずなのだ。

この魅惑の概念は、『道具分析』のつぎに書かれた著作である『ゲリラ形而上学』において中心的に論じられる。この著作は前作のいわば続編であり、前作がオブジェクトの退隠を論じたのに対して、オブジェクトどうしの関係を論じている。『ゲリラ形而上学』は、退隠する事物を関係させるという、いわば「事物の大工仕事」(carpentry of things, GM 20) に取り組んでいるのである。上述の代替因果の理論も『ゲリラ形而上学』において提出されたものであり、その際に魅惑の分析が重要な役割を担っていたのだ。

ところがこの魅惑の概念は、その後の著作ではそれほど前面に押しだされなくなってしまふ。オブジェクトと関係のあいだには断絶があり、オブジェクトは退隠するということと、それでもオブジェクトどうしは代替的に関係しあうということは、『ゲリラ形而上学』以降の著作においても、オブジェクト指向哲学にとって中心的な主張であ

りつづけている。だが、代替因果の手がかりであるはずの魅惑のほうは、そのあつかいが軽んじられているように思われる。

『ゲリラ形而上学』以降、ハーマンは思弁的実在論の論者たちとの議論を経て、彼らあるいはその周辺の論者たちにかんしておおくの論文や著作を執筆している。ハーマンは、そうした作業をつうじて、論述対象との差異化によって、みずからのオブジェクト指向哲学の特徴を明確にしていた。そして、そのように明確化されたオブジェクト指向哲学の体系が、それ自体で簡潔に提示されたのが、『四方オブジェクト』である。この著作は、メイヤスのすすめで、ハーマンの理論に馴染みのないフランス人に伝える意図で書かれたもので、2010年にフランスで出版されている。ここでは、簡潔に整理されたしかたで、オブジェクト指向哲学の体系が提示されている。だが、すでに完成したものが図式的に説明されているだけであり、魅惑の役割もその図式の一項目へと切り縮められている。けっきょくこの著作は、図式的すぎるあまり、さまざまな哲学的問いに対して十分な説明があたえられていないような印象をあたえるのだ。とくになぜ退隠するオブジェクトが、代替的にであれ関係することができるのか、という問いは正面から論じられていないように思われる。

これに対して『ゲリラ形而上学』では、魅惑の分析をつうじて代替因果の理論が正面から論じられている。とはいえ、その記述は複雑なうえに、『四方オブジェクト』で提示された簡潔な図式とはかならずしも合致しない部分もある。また準備作業として、ジャンコー、フッサール、レヴィナス、メルロ＝ポンティ、リングスらの現象学について、さらにオルテガのメタファー論や、ベルクソンのユーモア論についておおくの考察があらわれていて、全体的に冗長でもある。だがこの著作で論じられている魅惑の概念は、代替因果の最良の手がかりとなっている。さらに本節の結論から言えば、魅惑は、なぜオブジェクトと関係のあい

だに断絶があるのか、ということに対する一種の答えともなっているはずである。以下において、『ゲリラ形而上学』における魅惑の概念について考察することにしよう。

まずはそのための準備として、ハーマンがオブジェクトをふたつのタイプに分けているということを確認したい。オブジェクトには、「実在的オブジェクト」(real object)と「感覚的オブジェクト」(sensual object)がある。後者が感覚的な領域に現前するものであるのに対して、前者はそこから退隠する実在としてのオブジェクトである。この区別は、『ゲリラ形而上学』において導入されて以来、オブジェクト指向哲学にとって中心的なものとなっている。『ゲリラ形而上学』において展開された代替因果の理論がさらに簡潔に語りなおされた論文「代替因果について」のなかで、ハーマンはこのふたつのタイプのオブジェクトについて、つぎのように述べている。

すでに指摘したように、感覚的オブジェクトは実在的オブジェクトと異なる運命をたどる。実在的なシマウマや灯台は直接的なアクセスから退隠するが、感覚的な対のほうはすこしも退隠することはない。というのも、〔感覚的な〕シマウマはわたしの目の前にいるからだ。たしかにわたしは、そのシマウマを無限に多様な角度と距離から、喜びや悲しみとともに、夕焼けや豪雨のなかで眺めることができ、それによってこのシマウマのあらゆる可能な知覚を汲み尽くすことはない。だがそれにもかかわらず、〔感覚的な〕シマウマは、そのあらゆる部分的プロフィールに含まれた全体として、すでにわたしの目の前に存在しているのだ。わたしはそうしたプロフィールをとおして見ているのであり、統一的なオブジェクトとしての〔感覚的な〕シマウマのほうをみているのである。(VC 178)

わたしたちは、たんなる性質や感覚と件だけを直接的にとらえているのではない。そうした性質とともに、つねに統一された全体としての感覚的オブジェクトをとらえている。感覚の領域においては、ある一定の性質をともなった感覚的オブジェクトが現前しているのだ。ハーマンは、このように感覚的オブジェクトに引きこまれ、それに没頭したあり方を、「真摯さ」(sincerity, GM 135)と呼ぶ。ハーマンは、レヴィナスに由来するこの表現を、「なぞめいた道徳的含意なしに」(GM 135)もちいる。わたしは、倫理的次元ではなく感覚的次元において、シマウマに真摯に率直に向きあっているのである。わたしは、一定の性質をともなった感覚的オブジェクトとしてのシマウマに没頭しているのだ。

ハーマンの理論において特徴的なのは、感覚的オブジェクトが生じる場所が、わたしの精神のうちではないという点である。感覚的オブジェクトとしてのシマウマは、実在的オブジェクトとしてのわたしと実在的オブジェクトとしてのシマウマがむすぶ志向的関係の内部で生じるのだとされる⁸⁾。この関係自体がひとつのあらたなオブジェクトとなり、その内部において、実在的オブジェクトとしてのわたしは、感覚的オブジェクトとしてのシマウマに真摯に向きあうのである。「すべての知覚は、オブジェクトの内部で生じる」(GM 189)とハーマンは述べる。

とはいえ、たしかにこの理論は、関係を説明するはずの議論のなかで、実在的オブジェクトどうしの関係を前提としているという点で、論点先取のような印象をあたえるだろう。だが、志向的関係というオブジェクトの内部で直接的に接触するのは、実在的オブジェクトとしてのわたしと、感覚的オブジェクトとしてのシマウマである。あくまでも実在的オブジェクトとしてのシマウマは、実在的オブジェクトとしてのわたしから退隠しているのだ。それゆえ、この両者をほんとうの意味でむすびつける代替因果の理論は依然として必要

とされるのである。実在的オブジェクトとしてのわたしと実在的オブジェクトとしてのシマウマのあいだの志向的関係というオブジェクトは、この両者を実質的にむすびつけるものではなく、その内部に感覚的オブジェクトを住ませる場のようなものとして機能しているだけであると解釈することができる。感覚的オブジェクトとしてのシマウマは、実在的オブジェクトとしてのわたしと実在的オブジェクトとしてのシマウマとのあいだに生じる場のようなオブジェクトの内部に存在しているのだ。

退隠する実在的オブジェクトどうしは、まさにこの感覚的オブジェクトを媒介として、代替的にむすびつくことになる⁹⁾。ところが感覚的オブジェクトは、通常の知覚の場合には、「ブラックノイズ」(black noise)と呼ばれる偶発的な性質によって覆われていて、そのために媒介としての役割を十全にはたすことはないのだとされる。ここで、「ブラックノイズ」という表現は、カオス的な性質から成る「ホワイトノイズ」とは異なり、構造化されたノイズという含意でもちいられている(GM 183)。ハーマンは、感覚的オブジェクトとブラックノイズについて、つぎのように述べる。

実在的オブジェクトがあらゆるアクセスから果てしなく退隠しつづけるのに対して、感覚的オブジェクトは原理的に接触可能である。しかし、それは無関連なきらめく外皮によって覆い隠されている。より専門的な用語で言えば、すべての感覚的オブジェクトはブラックノイズによって包み隠されている。ブラックノイズとは、本質的ではないしかたでオブジェクトに括りつけられた機内持ち込み手荷物である。(GM 222)

わたしの真摯さの場面には、さまざまな感覚的オブジェクトがあふれている。たとえば、感覚的オ

プロジェクトとしてのイトスギに真摯に向きあう場合、その周囲には建物があったり、ある高さで太陽が照りつけていたりするだろう。そうしたさまざまなオブジェクトとのせめぎあいのなかで生じるブラックノイズが圧力のように機能して、イトスギにある特定の統一した特徴をあたえるのである。ブラックノイズは、わたしの知覚の場面全体を構造化し、感覚的オブジェクトに秩序をもたらす役割をはたしているのだといえる。ブラックノイズによって統一した特徴を付与された感覚的オブジェクトは、いまここでのわたしの知覚用にいわずカスタマイズされたオブジェクトである。この感覚的オブジェクトは、代わり映えすることのない、ありふれた日常的なものとして現前している。こうした通常の知覚においては、オブジェクトが二重に覆い隠されているのだと言える。まず、実在的オブジェクトが知覚の場面から退隠している。さらに、感覚的オブジェクトはブラックノイズによる圧力によって、その周囲に一定の特徴をまとっているのである。

さて、このようにオブジェクトが二重に覆い隠されたありふれた日常的な知覚の場面を一変させるのが、魅惑である。それは、わたしに対する「強力な情緒的衝撃」(GM 218)として機能するのだ。わたしの知覚用にカスタマイズされ、統一した特徴をまとった感覚的オブジェクトに対して、魅惑が変化をもたらすのである。ハーマンは、つぎのように述べる。

魅惑は、この統一を引き裂く。魅惑は、感覚的なイトスギそのものを表面化させる。そして周囲のブラックノイズが一掃される時、同時にまた、[感覚的な]イトスギの感覚的特徴がその核から引き剥がされるということが生じる。あとにはただ、わたしたちの知覚に住まうものよりも深遠である実在的なイトスギらしきもの (apparent real cypress) から発せられた放射物だけが残される。(GM

ハーマンは、メタファーを魅惑の典型例としてもちいる。たとえば、詩人が「イトスギは炎だ」というメタファーを生みだした場合を考えてみよう。このメタファーは、わたしのありふれた知覚の場面を一変させる。穏やかな「イトスギ」と荒々しい「炎」という、ほとんど共通点をもたないものがむすびつけられることによって、イトスギを覆っていた統一した感覚的特徴はふきとんでしまう。このメタファーは、日常的に経験するありふれたイトスギのイメージを解体してしまうのである。それによって、わたしは感覚的イトスギそのものに魅惑されることになる。そしてそこから、「なんだかわからないもの」(je ne sais quoi)としての、より深遠な実在的イトスギらしきものを透かし見るのだ。

ハーマンは、メタファーとはべつな魅惑の例として、さらにつぎのような事態を挙げている。

友人は、日々のできごとや会話のなかで、たえずぼんやりと現前するようなものとして、わたしたちの日常生活のうちに住みついている。しかし、裏切りをとおしてであれ、楽しい驚きをとおしてであれ、友人はそれによってわたしたちを魅惑するのだ。そしてその友人は、以前はブラックノイズの圧力によって、なめらかに統一された全体へと圧縮されていたみずからの特徴から切り離されることになる。(GM 223)

ありふれた日常的な知覚における、なめらかに統一された感覚的特徴を情緒的な衝撃によって引き裂くのが、魅惑である。驚くような一面を見せた友人は、もはや、そうしたなめらかな統一した特徴によって覆われたものとして、わたしにあらわれてくることはない。わたしは、そうした諸特徴が剥ぎ取られた、感覚的オブジェクトそのものとし

での友人に釘づけになる。それを媒介にして、汲みつくしえない余剰をとどめた、なんだかわからない実在的オブジェクトとしての友人と代替的にむすびつくことになるのである¹⁰⁾。

とはいえ、こうした魅惑によって、わたしは実在的オブジェクトとむすびつき、実在にかんするただしい認識ができるようになるのではまったくない。わたしに直接的に現前するのは、あくまでも感覚的オブジェクトだけである。それは、実在的オブジェクトのゆがめられたカリカチュアであり、翻訳である。実在的オブジェクトそのものはつねに退隠するのだ。ハーマンは、「魅惑は不在の形式におけるオブジェクトどうしの現前である」(GM 246)と言う。魅惑による代替因果は、いわば関係できないということが露呈するような関係である。魅惑は、「触れることなくして触れる」ことであると同時に、触れられなさがいっそう際だつような接触でもある。魅惑の経験とは関係の経験であるが、それはむしろ断絶の経験でもあるのだ。それは、感覚的オブジェクトのかなたに、汲みつくしえない余剰をともなった実在的オブジェクトが存在するというを、つまり関係しえないものが存在するというを暗示する。こうして魅惑によってこそ、オブジェクトの自律的な実在性と関係一般とのあいだに乗り越え不可能な断絶が存在するということがあきらかになるのである。

3. 汎魅惑論的宇宙のほうへ

前節において、つぎのことが確認された。ブラックノイズの圧力によってなめらかな統一性へと圧縮された特徴を、魅惑の衝撃が突き破る。それによってわたしは、感覚的オブジェクトを媒介にして、実在的オブジェクトと代替的に関係することになる。魅惑の経験とは、触れられなさがいっそう際だつような接触である。それは、関係の経験であると同時に、断絶の経験でもあるのだ。

このように前節で論じた経験は、あくまでもわたしと事物とのあいだで生じるものであった。しかしハーマンは、「魅惑は無生物の領域においてでさえも生じなければならない」(GM 245)と言う。ハーマンにとって魅惑は、たんなる美学に属すものではなく、因果性一般を説明する形而上学的な原理なのである。魅惑は人間の意識を前提としたはたらきではないのだ。「すべての意識は魅惑だが、すべての魅惑が意識なのではない」(GM 245)。ハーマンは、人間と事物、人間と人間のあいだだけでなく、事物と事物とのあいだにも魅惑による代替因果がはたらいているのだと考える。あらゆる実在的オブジェクトが、感覚的オブジェクトに真摯に向きあっている(GM 136)。そしてあらゆるオブジェクトが、他のオブジェクトに魅惑され、それと代替的につながっているのである。それゆえ、オブジェクト指向哲学は「汎魅惑論的」(panallurist, GM 244)であると言われるのだ。

しかし、なぜそのようなことが言えるのだろうか。いかにして哲学は、人間不在の世界のうちに、事物が事物を魅惑するあり方について語るることができるのだろうか。

ところでハーマンは、オブジェクトそのものを語るのではなく、人間がそれにアクセスするしかたを語る哲学を、「アクセスの哲学」(philosophy of access, GM 1)と呼んでいる。それはメイヤスの用語で言えば、わたしたちがアクセスできるのは思考と存在の相関のみであるとする「相関主義」(corrélacionisme, AF 18)にあたる¹¹⁾。ハーマンとメイヤスはともに、カント以降、哲学において中心的な態度となった、この相関主義あるいはアクセスの哲学を乗り越えて、人間不在の世界を語りだそうとする。それが、思弁的実在論の共通した意図である。とはいえ、すくなくともハーマンはその乗り越えにかんして、なんらかの論証を展開しているわけではない。ハーマンは、「わたしにとってそれ[相関主義]は、出発

点からひどい議論である」(QM viii)と言い、相関主義の乗り越えを論証するのではなく、前提として退けるという方法を取っているのだ。

とはいえ、アクセスの哲学の枠組みから、人間不在の実在論への移行もまた、魅惑の概念に着目することによって可能になるのではないかと思われる。ハーマンは、魅惑の暗示するはたらきについて、つぎのように述べる。

存在者は、世界内の他の存在者とのどんな関係からも、あるいはどんな影響からもかけ離れている。魅惑 (allure) が暗示する (allude) のは、そうしたあるがままの存在者である。(WWBH 187)

触れえないもの、関係しえないものの自律的な実在性を暗示するのが、魅惑である。魅惑によって暗示されるあるがままの存在者にとって、わたしとのこの関係は偶然的なものにすぎない。それゆえこの存在者は、わたしがそれに魅惑されていようがいまいが、あるいはわたしが生きていようが死んでいようが、そうした諸状況とはいっさいかかわりなく実在するのである。こうした意味での自律的な実在性を有した存在者を暗示するのが、魅惑の経験なのである。つまり魅惑の経験は、わたしの思考の不在によっても成り立つ事物の実在論的世界を暗示するのだ。魅惑は、人間不在の実在論的世界にかんする、いわば認識論的な根拠をなしているのだと言えるだろう。

しかし、汎魅惑論的宇宙の存在を論証するためには、このように自律的に存在する事物どうしが、さらに魅惑しあっているのかどうかを言えなければならないだろう。この点については、あらためて考察する必要がある。だが、すくなくとも以上のように魅惑というわたしの経験を出発点にして、アクセスの哲学を乗り越え、人間不在の実在論へといたることは可能である。

さて、本稿で考察した魅惑のあり方を踏まえた

ならば、汎魅惑論的宇宙とはどういったものになるだろうか。それは、あらゆる次元のオブジェクトがあらゆる次元のオブジェクトを魅惑する宇宙である。オブジェクトたちが魅惑すればするほど、触れえなさ、汲みつくしえなさが増大していく。あらゆる次元のあらゆるタイプのオブジェクトたちの自律的な実在性が氾濫し、宇宙は断絶に満ちたものとなる。

注

- 1) ワークショップ「思弁の実在論」の記録は、雑誌『コラプス』に収録された。そこには4人の発表者の発表原稿と質疑応答が含まれている。Cf. Ray Brassier, Iain Hamilton Grant, Graham Harman and Quentin Meillassoux, "Speculative Realism," in *Collapse III* (2007): pp. 306-449.
- 2) ブログ上のやりとりなどをつうじて、思弁の実在論をめぐってさまざまに発展した議論の一部が、つぎの論文集にまとめられた。ハーマンを含む編者たちの連名で書かれた、序文的な役割を果たしている論文のなかで、「言語論的転回」に対する「思弁的転回」が提唱されている。Cf. Levi Bryant, Nick Srnicek and Graham Harman eds., *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, Melbourne: re.press, 2011: pp. 291-303.
- 3) 雑誌『現代思想』(青土社)の2013年1月号(特集 現代思想の総展望2013)、2014年1月号(特集 現代思想の転回2014)、2015年1月号(特集 現代思想の新展開2015)、2016年1月号(特集 ポスト現代思想)は、それぞれ思弁の実在論を中心とした現代哲学の動向を特集したものであり、ハーマンへの言及を含んだ対談や論文を収録している。また、千葉雅也の『動きすぎたはいけない—ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』は、ドゥルーズ読解の補助線のひとつとして、ハーマンの哲学を参照している。ハーマンの哲学を主題的にあつかった論文としては、星野太の「第一哲学としての美学—グレアム・ハーマンの存在論」が挙げられる。
- 4) "object"の訳語は、ふたつの理由から、そのままカタカナ表記で「オブジェクト」とする。第一に、「オブジェクト指向」(object-oriented)という表現とのつながりを明確にするためである。"object-

- oriented”には、プログラミング用語としてすでに「オブジェクト指向」という定訳がある。したがってそれに合わせて、“object”の訳語も「オブジェクト」とする。第二に、ハーマンが“object”という用語に、わたしにとっての「対象」というニュアンスと、それ自体で存在する「物」というニュアンスの両方を込めているからである（前者は“sensual object”と呼ばれ、後者は“real object”と呼ばれる）。この両方のニュアンスを活かすために、カタカナ表記の「オブジェクト」を訳語として採用することにする。
- 5) “undermining”と“overmining”には、それぞれ「下方解体」と「上方解体」という訳語をあてることにする。“undermine”には、もともと「…の下を掘る」、「…の土台を削り取る」、「…を徐々に衰えさせる」といった意味がある。ハーマンは、根源的要素を設定し、オブジェクトを下から解体するような戦略に対して、“undermining”という表現をあてている。他方で、オブジェクトをそこから派生する「性質」や「関係」に還元するような戦略、つまり、オブジェクトを上から解体するような戦略に対して、ハーマンは“overmining”という造語をあてている。こうした含意を活かすために、本稿では前者に「下方解体」という訳語をあて、後者に「上方解体」という訳語をあてることにする。
- 6) ハーマンは、ハイデガーがもちいる“sich entziehen”に対して、英語で“withdraw”という訳語をあてている（BW 44）。ハイデガーのこの語は「脱去」などとも訳されるが、本稿では「退隠」という訳語を採用することにする。この「退隠」という語は、デリダの論文「隠喩の退隠」（『プシュケー』所収）から借用された。デリダは、ハイデガーがもちいる“Entziehung”や“Sich-Entziehen”に対して、フランス語で“retrait”という訳語をあてている（Jacques Derrida, *Psyché: inventions de l'autre*, Paris: Galilée, 1987, p. 81）。『プシュケー』の訳者である藤本は、デリダがもちいるこの“retrait”の訳語として「退隠」という語を採用している。デリダのハイデガー解釈とハーマンのハイデガー解釈には直接の関係性はないが、「退隠」という日本語がもつ「退き隠れる」という語感には、ハーマンが“withdraw”に込めた含意を十分に汲んでいる。したがって本稿は、“withdraw”の訳語として「退隠」

をあてることにする。

- 7) 一般的な解釈によれば、ハイデガーの道具分析は、理論的抽象に対する実践的活動の優位を示したものであるとされる。つまり道具分析は、理論と実践の差異を問題にしているのだと解釈される。これに対してハーマンは、道具分析において問題となっているのは、「事物と、わたしたちがそれに対してもちうるなんらかの相互作用とのあいだの絶対的な隔たり」（TB 2）であると解釈する。ハーマンによれば、道具は理論に対してだけでなく、実践に対しても現前することはないのだ。「手許存在性（Zuhandenheit）が指し示しているのは、人間のまなごしから逃れ去り、実践的活動にも理論的意識にもけっして現前しない暗く隠れた実在へと退隠するオブジェクトである」（TB 2）。ハーマンはさらにここから、このように解釈された道具存在の構造は、いわゆる「道具」だけでなく、あらゆる存在者にあてはまるのだと解釈する。そして、「道具存在は伝統的実体の奇妙な改訂版となる」（TB 2）と述べ、実体を軸にしたあらたな形而上学の構築へと向かうのである。ハーマンによるこうした一連のハイデガー解釈は、たしかに妥当性を欠くように思われる。しかしハーマンはみずからの目的を、「ハイデガー以上にハイデガーを理解することではなく、ハイデガー以上に道具存在を理解することである」（TB 6）と述べており、あくまでもハーマンの主眼は、道具分析を独自のしかたで解釈し、そこからハイデガーが思いもよらなかったあらたな形而上学の構築へと向かうことにあるのだと言える。こうした戦略にとって重要な鍵となる「退隠」にかんして、ハーマンは『存在と時間』からつぎの箇所を引用している（TB 21）。「さしあたり手許にあるものに特有な点は、それが手許にあることにおいて、いわば退隠しており（sich zurückziehen, withdraw）、そのことでまさに本来的に手許に存在しているということである」（Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Tübingen: Max Niemeyer, 1967, p. 69）。
- 8) この点にかんして、論文「オブジェクトへの道」では、つぎのように述べられている。「むしろ私たち〔私と感覚的な松の木〕は、私と実在的な木との関係の内部において出会うのである（この関係は間接的でなければならないのだが、ここで事柄を複雑にする必要はない）。〔実在的な〕木と私がなんとか

してつながりを形成するとき、私たちはあらたなオブジェクトとなる。すべての関係は、あらたな実在的オブジェクトを生み出すのである」(RO 177)。

- 9) 論文「代替因果について」では、つぎのように述べられている。「ふたつの感覚的オブジェクトが実在的オブジェクトによって代替的にむすびつくように、ふたつの実在的オブジェクトは感覚的オブジェクトによってむすびつかなければならない。わたしが他のオブジェクトと接触するのは、その内的生との不可能な接触をつうじてではなく、たんに表面をかすめて、内的生を動かすことによってである。…実在的オブジェクトどうしの接続は、感覚的媒介によってしか生じない」(VC 203-204)。
- 10) 魅惑のまたべつの例として、つぎのものが挙げられている。「才能あるヴァイオリニストが、コンサートの際に足をすべらせて転落したり、パニックを起こしたりして最後まで演奏することができなかった場合、彼女は、これまで暗黙のうちに彼女自身と同一視することを要求してきたヴァイオリニストとしての特徴と、もはやそれほど密接にはむすびつかない何者かとして曝け出されることになる」(GM 212)。
- 11) メイヤスーは相関主義について、つぎのように定義している。「こうした考察によって、カント以来の近代哲学の中心概念が相関になったのはいかなる点においてであったか、ということ把握できる。わたしたちが『相関』という語で呼ぶ観念にしたがえば、わたしたちは思考と存在の相関のみにアクセスできるのであり、一方の項のみへのアクセスはできない。したがって今後、そのように理解された相関の乗り越え不可能な性格を認めるといふ思考のあらゆる傾向を、相関主義と呼ぶことにしよう」(AF 18)。

参考文献

本稿において引用・参照した著作は、以下の括弧内の略号によって示した。

- Derrida, Jacques, *Psyché: inventions de l'autre*, Paris: Galilée, 1987 (『プシケ——他なるものの発明』藤本一勇訳, 岩波書店, 2014年)。
- Gratton, Peter, *Speculative Realism: Problems and Prospects*, London, Bloomsbury Academic, 2014。
- Harman, Graham, *Tool-Being: Heidegger and the*

Metaphysics of Objects, Chicago: Open Court, 2002 (略号 TB)。

- , *Guerilla Metaphysics: Phenomenology and the Carpentry of Things*, Chicago: Open Court, 2005 (略号 GM)。
- , “On Vicarious Causation,” in *Collapse II* (2007): pp. 171–205 (略号 VC) (『代替因果について』岡本源太訳, 『現代思想』, 2014年1月号)。
- , “Aesthetics as First Philosophy: Levinas and the Non-Human,” in *Naked Punch 9* (Summer/Fall 2007): pp. 21–30。
- , “On the Horror of Phenomenology: Lovecraft and Husserl,” in *Collapse Vol. IV* (2008): pp. 333–364。
- , “Zero-Person and the Psyche,” in David Skrbina ed., *Mind That Abides: Panpsychism in the New Millennium*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 2009: pp. 253–282。
- , *Prince of Networks: Bruno Latour and Metaphysics*, Melbourne: re.press, 2009。
- , “Levinas and the Triple Critique of Heidegger,” in *Philosophy Today* 53 (Winter 2009): pp. 407–413。
- , *Towards Speculative Realism: Essays and Lectures*, Winchester: Zero Books, 2010。
- , “Time, Space, Essence, and Eidos: A New Theory of Causation,” in *Cosmos and History: The Journal of Natural and Social Philosophy* vol. 6, no.1 (2010): pp. 1–17。
- , “On the Undermining of Objects: Grant, Bruno, and Radical Philosophy,” in Levi Bryant, Nick Srnicek and Graham Harman eds., *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, Melbourne: re.press, 2011: pp. 21–40 (略号 UO)。
- , “Response to Shaviro,” in Levi Bryant, Nick Srnicek and Graham Harman eds., *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism*, Melbourne: re.press, 2011: pp. 291–303 (略号 RS)。
- , *The Quadruple Object*, Winchester: Zero Books, 2011 (略号 QO)。
- , *Quentin Meillassoux: Philosophy in the Making*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2011 (略号 QM)。
- , “The Road to Objects,” in *continent* 1.3

- (2011) : pp. 171-179 (略号 RO).
- , *Weird Realism : Lovecraft and Philosophy*, Winchester : Zero Books, 2011.
- , “The Well-Wrought Broken Hammer : Object-Oriented Literary Criticism,” in *New Literary History* 43(2) (2012) : pp. 183-203 (略号 WWBH).
- , *Bells and Whistles : More Speculative Realism*, Winchester : Zero Books, 2013 (略号 BW).
- Heidegger, Martin, *Sein und Zeit*, Tübingen : Max Niemeyer, 1967 (*Being and Time*, Translated by J. Macquarrie and E. Robinson, New York : Harper & Row, 1962. 『存在と時間』 1-4, 熊野純彦訳, 岩波書店, 2013年).
- Levinas, Emmanuel, *Totalité et infini : essai sur l'extériorité*, Paris : LGF-Livre de Poche, 1990 (『全体性と無限』 上下, 熊野純彦訳, 岩波書店, 2005・2006年).
- , *Autrement qu'être ou Au-delà de l'essence*, Paris : LGF-Livre de Poche, 1990 (『存在の彼方へ』 合田正人訳, 講談社, 1999年).
- Meillassoux, Quentin, *Après la finitude : Essai sur la nécessité de la contingence*, Paris, Seuil, 2006 (略記 AF) (『有限性の後で』 千葉雅也ほか訳, 人文書院, 2016年).
- Ray Brassier, Iain Hamilton Grant, Graham Harman and Quentin Meillassoux, “Speculative Realism,” in *Collapse III* (2007) : pp. 306-449.
- Shaviri, Steven, *The Universe of Things : On Speculative Realism*, Minneapolis : University of Minnesota Press, 2014 (『モノたちの宇宙—思弁的実在論とは何か』 上野俊哉訳, 河出書房新社, 2016年).
- 飯盛元章 「他性と実在—レヴィナス, ハーマン, ホワイトヘッドをとおして—」, 『プロセス思想』 第17号, 2016年.
- 千葉雅也 『動きすぎてはいけない—ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』 河出書房新社, 2013年.
- 「思弁的実在論と無解釈的なもの」, 『身体と親密圏の変容』 (岩波講座 現代 第7巻), 岩波書店, 2015年.
- 星野太 「第一哲学としての美学—グレアム・ハーマンの存在論」, 『現代思想』 2015年1月号.

